

「武士道」著述の経緯と新渡戸稲造という人物について

新渡戸稲造が「武士道」を著述した経緯は、ベルギーの法学者ラブレールから「宗教教育がない日本で、どうして子孫に道德教育をするのか」と問われたのがきっかけでした。その時は即答できなかったのですが、新渡戸は自分の考え方や善悪の観念を育んできたものは武士道であったことに思いあたりました。そして、ラブレールと妻に大和心を説明するために、ヨーロッパの歴史や文学から類似の例証を上げ、1899年12月英文で「武士道」を著したのです。私が特に注目するのは、新渡戸が洗礼まで受けた熱心なキリスト教徒であるということです。クリスチャンである新渡戸が封建制度を土壌として生まれた「武士道」を書いたからこそ、客観的な見地から冷静に大和心を掘り下げているのだと思います。

大阪市立大学の佐藤全弘氏は新渡戸の72年の生涯を三つに分けています。①人と成る(1862-92)(新渡戸稲造は文久2年、南部藩士新渡戸十次郎の三男として誕生。10歳で東京英語学校、14歳で札幌農学校二期生として内村鑑三らとともに入学。18歳で卒業、東京大学入学時の問答で「われ太平洋の橋とならん」と答弁。21歳で渡米し、アメリカ・ドイツの大学で学んだ後、28歳のときアメリカ人マリー・エルキントンと結婚して帰国するまでの29年間)。

②日本のために尽力(1891-1919)(帰国後ただちに札幌農学校に奉職。32歳のとき、働く青少年のための「遠友夜学校」を開く。過労のため36歳で農学校を辞任し、渡米して静養中に「武士道」を書く。33歳のとき台湾総督府勤務、台湾糖業改良の基礎を築く。41歳で一高校長兼東京帝大教授に就任、全人教育により多くの人材を育てる。東京女子大学初代学長までの28年間)。

③世界のために尽力(1919-33)(57歳から国際連盟事務局次長として7年間勤め、アインシュタインらと国際理解と平和のため尽力。軍閥を批判して右翼の迫害を受ける。71歳のときアメリカで1年間に百余回の講演を行う。72歳のとき帰国し、カナダでの第五回太平洋会議に出席、会議終了後発病し、10月16日ビクトリア市の病院で逝去、享年72歳、多摩墓地に葬られるまでの14年間)。

新渡戸の生き方は、自らの立身出世のためではなく、人から求められてその任についていること、多くの要職を誠意と情熱と忍耐を持って成し遂げていること、一貫して自由と平和と民衆のために尽くしていることから多くの人々に愛され尊敬されています。特に、著書「自警録」の中で、英語で初めて演説するときの緊張と不安で苦痛の極地に達し、怖じ気づいてガタガタ震える様子を正直にさらけ出し、それをどのように乗り越えたかを詳細に書いています。新渡戸は誠実な人であると同時に、自分を飾らない真っ正直な人であり、その生き方に心を打たれ、尊敬の念を一層強くしました。日本を代表する本です。是非読んでみて下さい。

新渡戸稲造の印象に残っている言葉を三つあげます。「①自分の使命を自覚し、迷わず即実行すること。そして、成し遂げるまでやりぬくことである。②世に出る年齢に早過ぎるということなし。遅過ぎるということもなし。その人の潮時がある。③自分に与えられた環境は天命である。全てを受け入れ、正直に誠実に全力を尽くすことである。」好きな言葉はどれですか？